

か何かだからロシアに行つて St. Petersburg Univ. ででも見なくては……。

今私は藻類名彙の再版(3版)にかかつて今度は各種の記載と各属に1つ宛繪を入れるつもりで今 Chlorophyceae の本文丈け了り之から Phaeophyceae にかかる所です。三年位かかるでしょう(中略)。

此の4月3日から自分は自宅で海藻の講義をしてこの11月で第2回を終る。來年4月迄冬の中は設備がないから休んでまた4月から第3回をやる計劃、前後2回で12~13人位の聴講生が出來たわけです。

東京を離れて旅の空でみたら定めし東京がどんなになつたかとは夢寐にも思はれる事であろうが餘り變つた事はない。まだ日本橋通りを元の通り電車が通うて居て地下鐵も相變らず浅草と上野間丈け、今折角万世橋迄工事中だが自分は未だ一度も試乗せず、浅草の觀音様も御無沙汰です。所々方々ほりかへして茅場町の所や越中島へ來る橋の所などは田の様で毎日閉口。學會も變りなく植物學の社會も天下太平。

尙老婆心を以て付記すれば上の御手紙中の「藻類名彙の再版(第3版)」とあるのは先生の御逝去の翌年に出版された日本海藻誌のことで、當時は未だこの書名は出來ていなくて藻類名彙の第3版として出版する積りでいられたのである。  
(北海道大學理學部植物學教室)

## 故岡村金太郎先生の想い出

—— 紀伊瀬戸採集隨伴記 ——

木下虎一郎

「藻類」創刊號、卷頭の山田先生の高著をはじめ、每號、隨所に故岡村金太郎先生の御名前を拜見する。本邦海藻學の鼻祖として當然のことではあるが、今更乍ら先生の赫々たる遺業を偲び、追慕の念の禁じ得ないものがある。茲に紀伊瀬戸採集隨伴記を草し、先生の想い出とする。

× ×

岡村先生の紀伊瀬戸の採集は、昭和5年7月と6年8月及び7年4月の3回に亘つて、京大瀬戸臨海研究所(現在の白濱町、京大臨海實驗所)を根據

として行われた。筆者は3回共、終始先生に随伴して親しく御指導を仰ぐ幸運に恵まれた。先生、64歳から66歳の時代で、水産講習所長をおやめになられる前後であつた。當時、筆者は郷里の和歌山縣水産試験場(田邊)に奉職して、伊勢蝦の研究の爲め、毎日、田邊の役所から研究所に通つていた。時の研究所長は駒井卓先生で、岡田要先生も學生の指導によくおいでになつておられ、赤塚孝三先生が留守をあずかつて居られ、今、三重縣立大學水産學部に居られる椎野季雄博士が常勤されていた時分である。

先生おいでの報を受けて、先ず私の頭に浮んだのは、先生のいつもの脚絆、足袋、草鞋に足がための採集姿で、何よりも先に草鞋の買いととのえに走り廻つた記憶が今も新で、當時、既に田邊の様な田舎町でも仲々見つからなかつたものである。

採集は研究所を中心として、田邊灣内の加島、鹿島、四双島及び灣外の富田袋港あたりまで、就中、研究所前に展開する平磯に無數に散在するタイド・プールに目をつけられ、隨分之を熱心に攻められた。採集役は私で先生は6~7尺位の竹柄にガーゼ網つけた櫂を杖代りに持たれて、これで、あれこれと指圖された。處が困ることは、先生、いらだたれて來ると、この櫂先で、潜つている私のお尻をつついて指揮されることで、特にタイド・プールで、これをやられると、逃げ場に困つて悲鳴をあげたことも度々あつた。それはそれとして、このタイド・プールの攻略で、*Valonia ventricosa* J. AG. オホバロニア・*Dictyosphaeria favulosa* (C. AG.) Decsne キツカウグサ・*Dictyosphaeria bokotensis* YAMADA トゲキツコウグサ・*Struwea delicatula* KUETZ. サイノメアミハ・*Caulerpa racemosa* var. *laetevirens* WEB. v. BOS. スリコギヅタ・*Caulerpa racemosa* var. *clavifera* f. *macrophysa* WEB. v. BOS. センナリヅタ・*Caulerpa racemosa* var. *occidentalis* (J. AG.) BÖRG. エツキヅタ・*Caulerpa Okamurai* WEB. v. BOS. フサイワヅタ・*Acetabularia Möbii* SOLMES ヒナカサノリなど、南國味豊かな數々の珍種を獲た。その外、田邊灣内鹿島で *Caulerpa cupressoides* var. *disticha* WEB. v. BOS. ビヤクシソウの群落を見つけた時のお喜び顔、四双島のフジツボの上に着生する、先生が後に *Gelidium pusillum* f. *foliaceum* OKAM. と發表された矮小テングサを、採集してお目につけた時のルーベで見入られる喰い入る様な眼差しなど、今も私の目に寫る様である。又、研究所の雑賀彌之助氏が、時化あとの御幸ヶ濱に打揚げられていたのを拾つたというアジサイの花を見る様な美

しい團塊のアルコール漬標本を見られるや、直ぐ“*Chrysomenia Kairnbachii* ハナサクラだ こんな美事なのは始めてだ”と驚喜されたのもこのときで、海藻誌に載せられている寫眞(669頁, 319圖)は、その時に撮つて差上げたものである。

採集は、どの種類も随分どつさり採集された。“フワシクルを作つて海外の博物館や研究室に贈るつもりだ。”と言う様なお話であつた。採集物はどんなに澤山あつても、又、どんなに疲れていても、必ずその日の中に始末された。

整理は、先生と私の二人で、學生實驗室の大流しでしたが、先生は大小様々な澤山の臺紙を用意して来て居られていて、それが殆んど、封筒、カタログ類の餘白、表紙裏などの廢物利用であつた。従つて色合は、白あり、薄桃色あり、青味のもの、黄色のものなど、様々で、恐らく常に心掛けられて丹念に用意されたものと思えて、當時の若い私にも、何かしら頭の下がる無言の教訓が感ぜられた。

ドライヤーの取換えは日に何回となく、實にマテに、そして精力的に行われた。田邊の自宅から通勤している私が研究所へ来る迄に、先生自から既に何回となく、取換えを終えられていた。こんなことに先生を煩わしてはと思つて、私も随分早く出掛けて行つたが、通いの巡航船の發着時間の関係もあつて、一度も先生に勝つことが出来なかつた。

兎に角、この採集を通じて、標本を作り乍ら一々の種類に就いてお話下さる説明、休み時にうかがえる學問の話、趣味の話、水産界の動きなど、私には嘗てない勉強で、従來、全く馴染めなかつた海藻の面白味も、この時に開眼していただいたのである。

標本作製中の先生と私のこの時の寫眞が、毎日新聞田邊支局長の多田幸生氏が後に贈つて呉れて、今も私のアルバムを、又、先生の亡後、御遺族から贈られた研究室の先生のお姿は、私の書齋を飾り、先生から紀州採集記念にと賜つた硯は、身近かに愛用させていただいている。

(北海道區水産研究所)